



TITLE:

表紙ほか

AUTHOR(S):

CITATION:

表紙ほか. 研究報告 2014, 28

ISSUE DATE:

2014-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196346>

RIGHT:

研 究 報 告

第 28 号

- ヘルダリンにおける父と母のイメージ…………… 林 英 哉 (1)
—詩作と心理の「同一性という謎」—
- 女の芸術創造…………… 麻 生 陽 子 (23)
—ドロステ=ヒュルスホフの未完の悲劇『ベルタあるいはアルプス』
における両性具有のモチーフについて—
- 文明のなかの文学…………… 池 田 晋 也 (41)
—ハインリヒ・ハウザーの小説『海を渡る雷鳴』について—

2014

京都大学大学院独文研究室

『研究報告』バックナンバー

第1号(1985)

- 大川 勇: ある深層の物語の読解 — ムー
ジルの『特性のない男』研究のための序説
金子 孝吉: リルケの詩『偶像』について
田辺 玲子: 関係世界の創出 — アネッテ・
フォン・ドロステ＝ヒュルスホフの詩人像とそ
の世界
奥田 敏広: トーマス・マンの「モンタージュ技
法」について — 小説形式のパロディー

第2号(1986)

- 松村 朋彦: 心理学と小説のあいだ — カー
ル・フィリップ・モーリッツ『アントン・ライ
ザー』とその周辺
大川 勇: 千年王国を越えて — ムージルの
『特性のない男』における〈別の状態〉の行
方
加藤 丈雄: 『公子ホムブルク』について — 死
の恐怖とその超越を中心に
奥田 敏広: リオン・フォイヒトヴァンガーの小説
『成功』におけるヒトラー像について — 20
年代の証言の一つとして

第3号(1988)

- 加藤 丈雄: ハッピーエンドと悲劇 — 『公子ホ
ムブルク』の多義性について
兵頭 俊樹: ヘルダーリンの‘Wie wenn am
Feiertage...’に現れるディオニュソスの形象
をめぐって
竹本 まや: トーマス・マンの『すげかえられた
首』試論
友田 和秀: 『魔の山』試論 — 主人公ハンス・
カストルプの形姿をめぐって

第4号(1990)

- 津田 保夫: 『ヴァレンシュタイン』試論 — ネメ
シスの悲劇の観点から

- 千田 春彦: フライダンの『ベシヤイデンハイ
ト』研究のために — 三つの《はざま》をて
がかりとして
宮田 眞治: 覚醒へ向けての夢想 — 『ハイン
リッヒ・フォン・オフターディンゲン』試論(1)
千田 まや: トーマス・マンの『ファウストゥス博
士』 — デューラーの機能についての一考
案
斎藤 昌人: 一カフカ像 — 『流刑地にて』をめ
ぐって

第5号(1991)

- 青地 伯水: ホーフマンスタールの『厄介な男』
における「なおざりにされた生」と「達成され
た社会性」
谷口 栄一: C. F. マイアーの『ユルク・イエナッ
チュ』について — その多義性に関する一
考察
津田 保夫: 後期シラーの悲劇論に関する一考
察 — 悲劇的恐怖の概念を中心に
斎藤 昌人: 閉ざされる世界

第6号(1993)

- 片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『ラデツキー行進
曲』 — 「比較」と「繰り返し」のモチーフを
めぐって
千田 春彦: デア・シュトリッカーの『閉じ込めら
れた女房』について — 物語の重層構造
の目指すもの
福田 覚: 自然模倣説における真理媒介の構
造(1) — レッシング〈詩学〉に潜在する模
倣説の輪郭
青地 伯水: W. ヒルデスハイマーの『リープ
ローゼ・レゲンデン』におけるグロテスクなも
のについての一考察

第7号(1994)

飛鳥井 雅友: 「しばしばそれは絶望的な対話
なのです」 — パウル・ツェラーンにおける
対話の概念をめぐって

吉田 孝夫: 時間の渦 — R・M・リルケ『新詩
集』の数篇から

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『右と左』 — 二
つの方向

第8号(1995)

濱中 春: シラーの『マリア・ストゥアルト』 — 二
人の女王のドラマ

中村 直子: 分離動詞の認定をめぐる諸問題

飛鳥井 雅友: 神学の拒否と詩学 — パウル・
ツェラーンにおける神義論の問題

第9号(1996)

中村 直子: 正書法と分離動詞

濱中 春: シラーの『ヴィルヘルム・テル』におけ
るスイスの風景

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『百日天
下』 — ヨーゼフ・ロートのワーテルロー

飛鳥井 雅友: 「胸は張り裂け」 — ゴットフリー
ト・ベンの場合

第10号(1997)

濱中 春: シラーの『逍遙』における風景をめぐ
って — 風景の補償モデルとその矛盾

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓
話性(1) — 散文小品『通り(1)』について

片桐 智明: 物語の行方 — ヨーゼフ・ロートの
『果てしない逃走』と『カプツィン派教会納骨
堂』をめぐって

第11号(1998)

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓
話性(2) — 放蕩息子をめぐる二つの散文
小品について

片岡 宜行: ドイツ語の与格の分類について

國重 裕: クリスタ・ヴォルフ『クリスタ・T への追
想』について — その語りの構造

飛鳥井 雅友: ゴットフリート・ベンにおける〈抒
情的自我〉概念の登場をめぐって

第12号(1999)

片岡 宜行: ドイツ語の与格と空間補足語につ
いて

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーの絵画描写
について — エクプラシスの観点から

片桐 智明: ハイミート・フォン・ドーデラー四十
歳の小説 — 『最後の冒険』、騎士とドラゴ
ンの小説

KUNISHIGE Yutaka (國重 裕): Zwischen
Phantasiewelt und Wirklichkeit – Essay über
Ilse Aichingers „Die größere Hoffnung“

第13号(1999)

KUNIEDA Naotaka (國枝 尚隆): *Wilhelm Tell*
als ästhetisches Projekt

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける通
俗小説とメルヘンの再話について — 対
句法に関する試論

第14号(2000)

廣川 智貴: 文体論の理論と実践 — クライス
トの『ロカルノの女乞食』を例にして

佐々木 茂人: カフカの作品における歌のモ
ティーフ — 『歌姫ヨゼフィーネ、あるいは
ネズミ族』を中心に

國重 裕: オーストリア小説に見る《家族ドラマ》
の変遷 — M.シュトレールヴィッツ『誘惑。』
(1996)

第15号(2001)

- 伊藤 白: 『ブデンブローク家の人々』試論 — 「市民と芸術家」の生み出す四つの類型から
- 池田 晋也: アルトウール・シュニッツラーの『自由への道』 — 市民的なものと芸術的なもののあいだを浮遊する生
- 川島 隆: カフカの息子たち — 短篇「十一人の息子」読解
- 中原 香織: ヘルマン・ヘッセの『シッダールタ』について — 葛藤の不在がもたらす問題をめぐって
- 羽坂 知恵: 日常の「ヒーロー」 — ハインリヒ・ベルの『道化師の意見』について

第16号(2002)

- 佐々木 茂人: 東方ユダヤ人難民とプラハのユダヤ人 — カフカの伝記研究のために
- 川島 隆: 「こいつは途方もない偽善者だ」 — カフカの中国・中国人像
- 國重 裕: ユーゴスラヴィア内戦をめぐる西欧知識人の応酬 — ペーター・ハントケ『冬の旅』に対する議論を中心に

第17号(2003)

- 池田 晋也: 描かれた劇場 — シュニッツラーの短篇『侯爵様御臨席』
- 伊藤 白: ゼゼミ・ヴァイヒブロート — 『ブデンブローク家の人々』における女性像とキリスト教
- 川島 隆: ユダヤ人と中国人 — カフカにおける人種と性愛をめぐって
- 武田 良材: クラウス・マンの『メフィスト』 — ドイツ反ファシズム運動の失敗の反映として

第18号(2004)

- 廣川 智貴: 主語の文体論 — クライストの『決闘』を中心にして
- 熊谷 哲哉: 言葉をめぐるたたかい — シュレーバーと雑音の世界

ASAI Maho (浅井麻帆): Sehen im Wörterverbindungsraum bei Rainer Maria Rilke — Eine Wandlung vom Sehen hin zur Rose

川島 隆: 『万里の長城』における「男性」と「労働」の位置 — カフカのシオニズム理解を手がかりに

伊藤 白: 白いドレスのロッテ — トーマス・マン『ワイマールのロッテ』における女性像

武田 良材: 道徳的な女たらし — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像

國重 裕: 現代文学は「歴史」を語りうるか? — Katrin Askan (1966~)に見るDDR文学の現在

書評・文献紹介

第19号(2005)

青木 三陽: 手紙を書く騎士 — 『パルツィヴァール』における「学識」と「書物」の意味について

樋口 梨々子: 文学創作への萌芽としての音楽美学 — E.T.A.ホフマンの短編『ドン・ファン』試論

寺井 紘子: ホーフマンスタール文学における生と絵画

浅井 麻帆: ウィーン分離派館とヨーゼフ・マリア・オルブリヒ — 時代と分離派が求めた合目的性

熊谷 哲哉: 結び目としての神経 — シュレーバーにおける宇宙と身体

池田 あいの: 手紙論としての手紙 — カフカの恋文をめぐって

伊藤 白: ショーシャ夫人は美しいか — トーマス・マン『魔の山』における女性像と「東」

池田 晋也: ジャズアレンジされるヨーロッパ — ハンス・ヤノヴィッツの小説『ジャズ』

武田 良材: モラリストへの成長 — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 その二

書評・文献紹介

第20号(2006)

- 青木 三陽：歴史とフィクションの狭間で — ヴォルフラムの「原典言及」をめぐって
- 樋口 梨々子：E.T.A.ホフマンの『新旧の教会音楽』 — 「ロマン主義的なもの」との関連において
- 伊藤 白：フロイライン・エンゲルハルト — トーマス・マン『魔の山』における女性像と「同性愛」
- 廣川 香織：ハリー・ハラーの痛む足 — ヘルマン・ヘッセの『荒野のおおかみ』における身体について
- 池田 晋也：文学的ジャズ表象の諸形態 — ブルーノ・フランクとフェーリクス・デーрман
- 武田 良材：モラリストの革命性 — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 その三
書評・文献紹介

第21号(2007)

- 寺井 紘子：芸術と芸術家 — ホーフマンスタールとリルケの場合
- 廣川 香織：叶えられた理想と失われた身体 — ヘッセ文学の転換期における「顔」のモチーフについて
- 永畑 紗織：ヨハネス・ボブロフスキーにおける闇と光 — 『ねずみのおまつり』を中心に
- ヴェレーナ・ルツチュマン(川島隆 訳)：たくましい少女たち、繊細な少年たち — ヨハンナ・シュピーアの児童文学作品について
書評・文献紹介

第22号(2008)

- 土屋 京子：プロメテウスの火と E.T.A.ホフマンの『G町のジェズイット教会』
- 藤原 美沙：子どもへ向ける視線 — アイヒェンドルフの2篇の詩より
- YAMAZAKI Asuka (山崎 明日香)：Das Verschwinden der Differenzierung in der Todesgemeinschaft in Richard Wagners *Tristan und Isolde*

- 浅井 麻帆：「セセッション」から「分離派」へ — 日本の Wiener Secession 受容史における訳語の変遷について
- 武田 良材：アンネマリー・シュヴァルツェンバハにおける反ナチス — エーリカ、クラウス・マン、そして山との関係
- 永畑 紗織：異教の神ペルーンとサルマチア — ボブロフスキーの短編『異教徒たちの至福』について
- 菅 利恵：ドイツにおける「ドイツ — トルコ」二言語教育 — 複言語主義とドイツ語教育のはざま
- BID(伊藤白 訳)：『図書館が良い21の理由』
書評・文献紹介

第23号(2009)

- 菅 利恵：愛による主体化 — シラーの劇作品をめぐる試論
- 土屋 京子：言語起源論と E.T.A.ホフマンの動物 — 犬ベルガンサ、猿ミロと猫ムルの言語をめぐって
- 藤原 美沙：詩人と「子ども」の関係について — アイヒェンドルフの小説『詩人とその仲間』より
- YAMAZAKI Asuka (山崎 明日香)：Die Widerspiegelung des zeitgenössischen Englandbildes durch Tristan in Richard Wagners *Tristan und Isolde*
- 加賀 ラビ：ホーフマンスタールの『アルケステス』について
- 武田 良材：オリエントでの自分探し — アンネマリー・シュヴァルツェンバハの『幸せの谷』
- 永畑 紗織：境界に立つショーペンハウアー — ボブロフスキーの短編『窓辺の若い紳士』について

第24号(2010)

- 西尾 宇広：公／私をめぐる価値観の交錯 — クライスト『ミヒヤエル・コールハース』
- 土屋 京子：博物学の夢想と冒瀆 — E.T.A. ホフマンの『ハイマトカーレ』と『蚤の親方』
- 藤原 美沙：二人の女性と「子ども時代」の関係 — アイヒェンドルフの短篇『誘拐』より
- 熊谷 哲哉：カール・デュ・プレルの心霊研究における科学と発達
- 池田 あいの：音楽的翻訳の可能性 — ブロート、ヤナーチェク、カフカ
- 宇和川 雄：イメージ世界の観相学 — 1931 年頃のベンヤミンのイメージ思考について
- 武田 良材：コインの亡命小説の風刺について — 長編小説『急行三等車』をめぐる議論を中心に

第25号(2011)

- 西尾 宇広：友人たちのデモクラシー — クライスト『ヘルマンの戦い』における友情の論理
- 田辺 真理：E.T.A. ホフマン『ある劇場監督の奇妙な悩み』について
- 土屋 京子：「わたし」について語る猫 — 自伝文学と E.T.A. ホフマンの『牡猫ムルの人生観』
- 麻生 陽子：「鏡像」の詩学 — アネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフの『ユダヤ人のブナの木』
- 宇和川 雄：バラージュ、コメレル、ベンヤミンと無声映画の時代 — 「動物の身振り」のなかで
- 風岡 祐貴：インゲボルク・バッハマンの『出航』にみる「抵抗」の表現について

第26号(2012)

- 西尾 宇広：ロベール・ギスカルあるいは不在の君主 — クライストの民衆観と遅延された革命
- 土屋 京子：闇に生きる動物の世界体験 — E.T.A. ホフマンの『廃屋』における動物磁気と共通感覚について

- 藤原 美沙：「すべての声がともに春をつくる」 — アイヒェンドルフの『大理石像』における「子ども時代」の再現
- 麻生 陽子：もうひとつの農村ユートピア — ペーター・ローゼンガーター『最後の人ヤーコプ』における「アメリカ」
- 加賀 ラビ：20 世紀のオペラ・セリア — ホーフマンスタールの『ナクソス島のアリアドネ』について
- 武田 良材：子どもの反抗 — イルムガルト・コインの小説『子どもたちが一緒に遊んではならなかった女の子』
- 寺澤 大奈：マックス・フリッシュ『ビーダーマンと放火魔たち』 — 「教訓のない教訓劇」と経済格差の問題
- 山崎 明日香：ハイナー・ミュラー『エレベーターの男』の素材について — フィリップ・K・ディックの SF 小説からの影響を探る

第27号(2013)

- 藤原 美沙：想像力・読書・教育 — アイヒェンドルフの『予感と現在』における「子ども」に関する諸問題
- 土屋 京子：国際学会報告 — Konzepte des Subjekts und Konzepte der Subjektivität: 1800/1900 29.-31. August 2013 in Bielefeld

INHALT

HAYASHI Hideya :	
Vater- und Mutterbild bei Hölderlin	
— „das Rätsel der Identität“ zwischen Poetik und Psychologie	(1)
 ASO Yoko :	
Weibliche Kreativität	
— Das Androgynie-Motiv in Droste-Hülshoffs Dramenfragment	
„Bertha oder die Alpen“	(23)
 IKEDA Shinya :	
Zivilisation in der Literatur	
— Über Heinrich Hausers Roman <i>Donner überm Meer</i>	(41)

執筆者

麻生陽子	clair_de_lune_1216@hotmail.co.jp	(京都大学非常勤講師)
池田晋也	iksn902basspos@gmail.com	(京都市立芸術大学非常勤講師)
林英哉	godzilla_0415@yahoo.co.jp	(大阪大学附属図書館図書職員)

第28号編集長

児玉麻美	ymw_mrdk_mdnnt@hotmail.co.jp	(京都府立大学非常勤講師)
------	------------------------------	---------------

第28号論文査読委員

川島隆	(京都大学准教授)
熊谷哲哉	(近畿大学講師)
菅利恵	(三重大学准教授)
谷口栄一	(大阪府立大学准教授)
西村雅樹	(京都大学名誉教授)
松村朋彦	(京都大学教授)
吉田孝夫	(奈良女子大学准教授)
	(五十音順)

研究報告 第28号

非売品

2014年12月発行

発行所 京都大学大学院独文研究室 研究報告 刊行会
〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部内

Tel 075-753-2826

郵便振替 01060-2-38520

印刷所 株式会社 田中プリント

〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入
石不動之町 677-2